美醜逆転幻想物語

れいさく まさと

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方あべこべもっと増えろこんちくしょう。

はい、東方ｐｒｏｊｅｃｔのあべこべ成分が足りないので、補充のために自分で書くことにしました。

文も拙いですし、不定期更新になるかもしれませんが、見ていってくれたら幸いです。

では、宜しくお願いします。

※五月現在、リアルの事情により更新を停止しています。ご容赦ください。

目次

紫さん ―― 1
二人の八雲 ―― 9
赤・白・黒・紫・藍 ―― 14

紫さん

上原（かみはら）　比叡（ひえい）は凡人である。
何でもできるがある程度までしか成長しない。
身長は１７０ちょっとで、顔も中の上程度。
交友関係もあるそこそこで……どこにでも居そうな、大学生。
比叡とは、そんな男だ。
だから今日もいつも通りに、ただ平凡な一日を過ごしていただけだった。
……なのに。

スーパによった帰り道、このあたりであまり見かけたことがない人物に出会った。
金髪で、肌は陶器のように美しく、スラリと伸びた手足。
出るところは出て、引っ込むところは綺麗に引っ込んでいる。
何よりもまるで彫刻かと見間違えるかのような整った顔。

……モデルさんかな？　服もあまり見慣れないものだし。

話すのは気が引けるが、もし道に迷っていたら相手も困るだろうし、どうしたのか聞くだけ聞いてみるか。

「すみません、どうかしましーー」

瞬間、突然の浮遊感。

それが足元にいきなり現れた穴に落ちているとは、思いもしていなかった。

「なっ!?　ちょ、うわあああああああッ！」

体感時間は5秒といったところか。

5秒後、俺の体は地に叩きつけられ、そのまま気を失った。

ｓｉｄｅ：八雲　紫

……私が一体何をしたっていうんだ。

私はただ結界のほころびを直そうとしたらたまたま外の世界に出てしまって、修復後帰還。幻想郷の管理者たる行動しかしていないはずだ。

なのに……。

「紫様。拉致はいけないと思います」

「だから違うって言ってるじゃないのよっ!?」

なぜ、男性が一人ついてきてしまったのか。しかも超絶イケメンの。

そういえば戻ってくる前、どこかから叫び声が聞こえたような。

「もう一度言います。自らの姿が受け入れられないからと言って、外の世界から好みの男性を拉致らないでください」

「私そんな度胸ないわよ！　第一、好みの男性を庭に叩きつけたりしないでしょう!?」

別に好みでないかと言われればＮＯと言うしかないが。

「それに私達は妖怪。何刻と時が過ぎようと醜い姿なのよ？　受け入れてもらえるわけが……」

「……うー、ん。うぁ？」

男性が起きる。男性の声なんて久々に聞いたかもしれない。でも今まで聞いてきたものとは、どこか違う。

透き通ったとても綺麗な声。耳にしているだけで体の力が抜けていくようだ。

っと、危ないところだった。私は咄嗟に持ち歩いているお面を付ける。

こんな醜い顔を目覚めてすぐには見たくあるまい。

そう配慮しての事だった。

「……変な宗教勧誘かな？　すみません、そういうのには興味無いので」

男性の口から最初に出た言葉はそれだった。

その一言を聞くだけで、心臓が鼓動を早めだす。

できるだけ目の前の彼にこの鼓動を悟らせないように努めて、答を紡ぐ。

「ここは、幻想郷。忘れられし者達が集う、あなたの知るものとは違う別の世界よ」

それから私は彼に様々なことを説明した。

はじめは間を丸くしていた彼も、私が真剣に話すうちにこちらの話に聞き入っていた。私の目を見ながら。

「本当の話、なんですよね。それって」

「ええ。そして貴方は今二つの行動が取れます」

帰るか、帰らないか。

この地に一度踏み入ってしまったからにはしなければならない、恒例の質問。

ここで「親が心配なので」とか「あっちには友達がいるから」と言って「帰る」を選ぶまでが定型であり、というか大体9割はこっちを取るーー

「ーー最後に一つ、俺から質問というかお願いというか……があるんですが、聞いてもら

えますか？」

なんだろうか。名も伝えたし、説明に不備はなかったはずだ。他に聞かれることなんてあっただろうかと考えて。

肯定の意を示すと、じゃあ、と言って。

「お面、取ってくれませんか」

ｓｉｄｅ：上原　比叡

もう一回あの美しい顔を見てみたい。

紫さん、だったか？　その隣にいる人も絶対美人だろうし、スタイルいいし、ぶっちゃければ二人ともどストライク（多分）なんだが。

だからこそ、なぜ顔を隠しているのか。

あっちで見た顔とは変わってるとか？　いやいやまさか、そこまでこの世界はおかしくないだろ。まず俺の体に、異変が見られないし。

じゃあどうしてーー？

「とても、醜いわよ？」

落ちてきた呟きはとても重く、寂しいものだった。

「肌が白くて、指も体も細くて胸が大きい。おまけに顔立ちが最悪。目も鼻も綺麗に整ってしまっている」

それって全国の女性に喧嘩売ってません？

逆に紫さんほど美しい女性を見たことがないんだが。

呆気にとられている俺をそのままに、彼女は面を取った。

やっぱり、

「ーー美しい顔だ」

……ハッ!?　つい声に出てしまった！

途端紫さんが俺に抱きついてくる。
ちょっとメーター振り切れそうになるんでやめてもらっていいですかね、もちろん理性の。
「……もう一度、言ってちょうだい」
「うぉ、あ、う、美しいです、紫さん」
嬉しい、と言ったのだろうか。
その彼女の声は、涙で濡れていた。

二人の八雲

side：八雲藍

……何が起こっているのだ。

「んふふ～、残ってくれて嬉しいわ、比叡～」
「紫さん、ちょっとくっつきすぎですって……ほら、藍さんも見てますし一旦離れましょう？　ね？」

顔を赤一色に染めて紫様を引き剥がそうとする比叡殿。どうやら紫様は彼が幻想郷に留まってくれることがこの上なく嬉しいようだ。無論、私だって感激している。だがちょっと待って欲しい、一体なんだこの構図は。
ーー想像してみてほしい、絶世の美男子の隣に醜悪の塊である存在が並んでいる、というか絡みついている場面を。あぁ、主とはいえ、私が従者であるとはいえ言わせてもらおう。

……吐いてもいいですか、と。

見苦しさの塊へと視線を巡らせなければ、それはそれは絵画を連想させる美しさだ。彼の腕に絡まる悪魔にさえ目を向けなければ、なのだ。

我が主人がこれだけ不細工であるーー私自身人のことは言えないがーーにも関わらずこれだけ好意的に接してくれる比叡殿には、感謝せざるを得ない。紫様のここまで晴れ晴れした笑顔など、いつ以来だろうか。

でも紫様、もう一言だけ言われてください。

陥落されるのが早すぎます、とだけ。

紫様が比叡殿を信用している以上、私だけが仮面をつけているのは失礼に当たる。

考えがそこにたどり着き顔に手を伸ばし、私の下劣さを留めていた最後の砦を外す。

紫様以外の前でこうやって仮面を外すのは、もしかしたら初めてかもしれない。

顔に吹き付けられた空気は、どこか冷たく感じられた。

まだ春の陽気が漂っている時期とはいえ、ほとんど夏のようなものだ。この冷たさはきっと、私の心を表していてーー。

「……なんだ、やっぱり綺麗じゃないですか」

しかし私の精神はそんな彼の一言と朗らかな笑顔で、いとも容易く熱に上書きされていった。

紫様の事言えないなぁ。私も大概、惚れ込みやすいようだ。

ｓｉｄｅ：上原比叡

藍さんは美女といえば美女なのだが、紫さんのそれとは若干異なる。

紫さんが妖しく光り、妖艶な美しさを帯びているとしたら、藍さんのものは凛々しさがベースにある。

鋭い目は彼女の心根の強さを表し、主を守るという忠誠心は常に佇まいから滲み出ている。俗に言う、『クールビューティー』という奴だ。

タイプの違う二人の姿は、むしろ二人一緒にいなければ不自然だと感じるかもしれないほど絵になっていた。
そのまま見惚れていると彼女の顔がみるみるうちに赤くなっていくのだが……褒められ慣れてなかったのかな？
自分の言葉に照れてくれているという事実がたまらなく嬉しくーー紫さんが泣いた時にも感じたーー自然と笑みがこぼれてしまう。
すると左から上着を軽く引っ張られる。
ゆっくり振り向くと、頬を膨らまし、少しむくれた表情の紫さんが、そこにいた。
怒ってるのかな？　むしろ可愛かったり和んだりするんだけど。

「……藍ばっかりズルイわ」

そう言って紫さんは体を押し付けてきて、彼女の体の大きな双山や柔らかな肉付きとかの感触が直に伝わってくる。
これはちょっと、どころかかなり恥ずかしい。
だが悪い気分では無い為閉口していると、今度は藍さんがこちらに寄ってきた。

「……紫様ばっかりズルイです」

ペットは飼い主に似るなんていうけど本当にそうなんだなーあはは、なんて、俺は軽い現実逃避をする。

紫さんはいっそう強く腕を締め付けて来てーーぎゅうっ、という音が似合いそうな具合にーー対する藍さんはそっと腕を絡めてくる程度だ。しかし彼女は顔を真っ赤にしながら俺の右隣に座っているため、どちらも破壊力は相当である。

結局三時間近く経つまで彼女達は俺の横に付いてきた。離れた時には一瞬不安げな表情を見せたものの、

「流石にもう日が暮れてきちゃったから、色々準備しないと」

と言えば、二人とも満足気な顔に変わっていった。

赤・白・黒・紫・藍

ｓｉｄｅ：上原比叡

夕食後また両隣に二人が並んで、しかし真面目な顔を作り、幻想郷の紹介の際に隠していた信じられない事実を俺に話してくれた。

この世界の美醜は、俺とは真逆であるのだという。

しかも男性の顔のレベルが低く、俺のような普通の顔でもかなりのイケメンの部類に入っている、らしい。

つまり、幻想郷では。

吹き出物が美の象徴。

肌は荒れていれば荒れているほど美しく。

理想の体型はキュッ、ボン、ボン。

「……じゃあ紫さんと藍さんって」

「吐き気がするほどの不細工（です）よ」

「……信じられないです」

彼女達妖怪は人間とは違い長寿で、なおかつ体型の変化が起こりにくいとのことで、生まれた瞬間に美女かブスかが分かってしまうのだと言う。
どれだけ頑張っても理想の女性に近づけないというのは苦痛だっただろうなぁ。長く生きてきたのなら尚更。

「そんなに暗くならないで、比叡」
どうやら、俺はいつの間にかそんな表情をしていたらしい。気落ちしていたのは確かだが、なるべく表に出さないようにこれでも頑張ったんだけどなぁ。
「今の私たちには理解者（あなた）がいる。それだけで十分よ」
彼女の言葉に同意するように、藍さんが手を重ねてくる。
「俺は、貴方がたの助けになれたんでしょうか」
「勿論です、比叡様」
「でも比叡、図々しいとは思ってるのだけれど、一つ頼まれてくれないかしら」

「私たちだけじゃなく、私の知人たちも救ってくれないかしら」

ｓｉｄｅ：博麗霊夢

ズズズ、と。私が茶をすする音だけが境内に響く。
幻想郷の守護者であり、力のあるものから代々紫によって選出される。
それが博麗の巫女。
だけどどうしてか選ばれるものは全て外見が劣悪な者達ばかり。私だってそうだ。
しかもどれだけ自分を磨こうとしてもー食事量を増やしたり、不摂生な生活を送っていた時期があったー巫女としての仕事が、それらをまるっと無駄にしてしまう。
妖怪退治。あれは想像よりはるかに体内のエネルギーを使う。そのせいでせっかくつけた脂肪が落ちる、というかまずつかなくなる。

結局肉をつけようとするのは巫女を始めて一、二年で辞めた。
それと、何年も博麗の巫女をやってきて未だに慣れないことがいくつかある。
例えば、助けた村人達に恐怖の視線を向けられること、とか。私の顔が汚いのは違いないけど、だからって助けたのに感謝の念も持たずに逃げていかれるのは寂しいどころじゃない。
博麗の巫女の立場は二つ。
守護者と、醜女。
まだ『博麗』を譲る気は塵ほどもないものの、どこかの妖怪にサラッと殺されて死ぬのも有りじゃないかと、今の自分は欠片でも考えてしまう。
「……くだらない。私より強い妖怪なんて、そこら辺に転がってるわけないじゃない」

ーー彼女は気づかない。自身の心の軋みに。
ーー彼女は目を向けない。自身の心の穴に。
ーー彼女は気づけない。自分の心が、既に、壊れかけていることに。

満身創痍。それが彼女の心の現状だった。

「霊夢、何難しい顔してるんだ?」

考え事をしていたせいか、外からの声に反応するのが遅れた。

聞きなれた、私の親友の声だ。

「何でもないわ。それで、何の用事なの魔理沙。またお茶だけタカリに来たの?」

だったら賽銭を入れていけ、と視線で訴えるも、カラカラと笑い飛ばし遠慮なく部屋へと上がってくる。

彼女は霧雨魔理沙。私の唯一の親友で、この神社に来る珍客のひとりだ。

魔理沙も相当な不細工だと、私も彼女も思っているのだが、あまり気にしていないようだ。

その話を初めて振った時だって笑いながら

「魔法の実験とかで家に籠ることが多いから、あんまし気にならないぜ!」

と言っていたのをよく覚えている。

「いいだろー茶くらい。死ぬわけじゃあるまいし」

「私にとっては死活問題なのよ」
だって人里に買い物なんてあんまり行けないし。
いつもの事だからと、半ば諦めて魔理沙にお茶を出す。
「……霊夢、足りないぜ」
「何がよ。ちゃんとお茶は入れてあげたでしょ、湯のみギリギリまで」
「そうじゃなくてだな、ほら、私は客人だぜ？」

「お茶請けとか」
「はっ倒すわよアンタ」

もはや日常の一部となったこの掛け合い。
これをやっている時は心が休まっている気がする。

「ーーー？」
「ーーー、ーーーーー。」

「ーー。ーーー、ーーーー！」

……これ以上珍客が増えるのは勘弁願いたい。

こっちに来られても、出すものなんてお茶ぐらいしか元々ないんだし。

それに彼らがもし人間でも多分そいつらは参拝客じゃない。どうせ冷やかしとかその類だろうにーー

「ーーせっかく神社に来たんだし、参拝ぐらいはしていかないとね」

ーーー!?

「……なぁ霊夢、い、今おおお男のここ声が」

「ええ、私も、ハッキリ聞こえたわ……」

私と魔理沙が同時に体を震わせる。

……まさか男の参拝客が来るなんて予想外だったわ。

しかも、参拝してくれるの？　この神社に？

早くお面を取り出してこないと。もし見られたら相手が大変なことになってしまう。

主に吐き気とか。

折角の参拝者第一号をここで失う訳にはいかない。

そう思い立ち上がった後、普通ならそこにいるはずもない、有り得ない声を二つ、私達は聞いた。

「そうしてくれたら霊夢も喜ぶんじゃないかしら。
この神社自体あまり人が寄り付かない場所だから、彼女、お金があまり無いのよ」
「そうです比叡様。
霊夢の信用を得るのなら参拝、もとい賽銭箱にお金を入れるのが一番手っ取り早いかと」

おい私をどんなイメージで捉えてるんだそこの妖怪二名。
ってそこじゃない。
え……、紫と藍？

賽銭箱に銭が入り、空間で音が反響し、私の耳にまで届く。
でもそれ以上の衝撃に、私は体を動かすことが出来なかった。

「そうだ、上がっていかない、比叡。
お賽銭も入れたことだし、霊夢も歓迎してくれるはずよ」

紫が放ったその言葉で、私はやっと我に返ることが出来た。
そうだ、お面を取りに行かなければ。何故紫と藍が男性を連れているのかは知らないけど、来ると言った以上その足はもう止められまい。
だったらせめて、せめて顔だけは隠しておかなければーー。

「ーーで、その博麗の巫女が、彼女よ」

正面から聞こえた紫の声。
気のせいだと、嘘だと言ってくれ。
そこはこの部屋の出口だ。
お面は別の部屋にあるからと、たった今部屋を出ようとしていたところなのに。

なんでそこに、スキマを使ってまでアンタが立っている。

「そう、この子が」

居た、居てしまった。
そこに、参拝してくれた男性が。
顔を見られたくない、でもお賽銭を入れてくれた相手に対して顔を背けたままでいるのはどう考えても失礼だ。
数秒の葛藤の末、後者が勝ち上がり意を決して私は顔を上げた。

その後の記憶は、無い。
最後の記憶は男性が綺麗な目と顔で私を見つめ、笑ってくれたことだった。